

分析活動を中心に据えた音楽の授業に関する実践研究

—生徒一人ひとりの分析をまとめ上げる合唱活動の可能性—

伊 藤 真

(就実短期大学)

はじめに

本稿は、音楽の授業実践において音楽表現の土台となる音楽理論や分析活動を中心に据えることによって、その場の雰囲気ではなく過ぎていく授業から脱し、生徒が他の音楽に接したときや将来的な音楽生活の中で自ら音楽の中身を見極め、自分の考えによって表現することができるように方向づけること、つまり、生徒が音楽と対峙し、その音楽のもつよさや特性を感じたり認識したりする能力を培い、自己表現につなげることをめざした基礎的実践研究の1つである。この背景には、これまでドイツの音楽科教育を研究する中で、ドイツでは音楽理論や音楽の社会的・歴史的・哲学的考察（熟考）に集中的に取り組んでいる実態を目の当たりにしたことが大きく影響している¹⁾。ドイツでは職業コースと大学進学コースに分離される学校制度を下敷きとして、学校における各教科の学習内容が学問的に色彩の強いものとなっている。職業コース（基幹学校や実科学校など）と大学進学コース（ギムナジウム）の学習内容を比較すると、大学進学コースの内容を基準として職業コースの内容が（少ない授業時間数に合わせて）削減・減少される形をとっている。大学進学コースでは大学入学資格試験として音楽も選択できることと、大学における音楽の専門的学習（研究）の基盤をつくることなどの理由によって、音楽科教育が少なからず学問的色彩の強いものとなることは理解できよう。我が国においても、学問的に基礎づけられた音楽科教育、すなわち、生徒にとって遊びではなく学びの多い音楽の授業を展開することは重要なことであり、現在の我が国の音楽科教育において重視されるべきことではないだろうか。

現在、多くの音楽科教員によってさまざまな授業研究が行われている。そのほとんどは、生徒にとって楽しいだけでなく、学習した証として何らかの能力や技能を確実に獲得させるための術を模索し、アイデアを発展させるものであろう。音楽科が学校教育において教科の1つとして位置づく以上は、他の諸教科と同様に音楽科においても生徒に定着させるべき学習内容をあたり前に定着させることの必要性が、教育現場では異口同音に叫ばれている。本稿は、その中の一授業研究例として、比較的高度な「分析」という活動を中学校の音楽の授業で扱う方法を提示するとともに、生徒が表現しようとする音楽を面前にしてどのような取り組みの可能性があるのかを考察を行う。

1. 音楽理論に関する学習範囲の構成

音楽分析とは、音楽の諸要素を認識し、それらを基に構造を把握したり、作曲家や作詞家、音楽の背景となる文化的・社会的要素などの理解を深めたりすることをおして、作品を理論的に扱う作業といえよう。したがって、大きく音楽理論の枠組みの中に位置するものである。

学校の授業における音楽理論の学習は、音楽的行動力の促進と音楽的判断力の育成を大きな目標としている²⁾。音楽的行動力は、記号体系（記譜法）の教授や音楽の基本概念（空間・時間・音の形成・構成）の教授によって促進される。また、音楽的判断力は、個人的な美的評価を行う能力の獲得や歴史的な美的価値観に関する知識の獲得をおして育成される。

フェルテン（K. Velten）は、学年に関連した教育計画によって音楽理論に関する学習範囲を構成することが重要であることを述べている。すなわち、下級の学年では「基礎的音楽論（Elementare Musiklehre）」を学習の範囲とする。中級の学年では「形成論（Gestaltungslehre）」を学習の範囲とする。そして上級の学年では「音楽の理論（Theorie der Musik）」を学習の範囲とする³⁾。

まず下級の学年の「基礎的音楽論」では、記号体系を含む音楽の物質的な基本概念を伝達することが中心となる。素材（響き、物音、音）の現象形態、空間と時間、音量や音色などの音楽の構成要素を扱う。素材の現象形態について体験的・実験的活動をとおして学習すると、その後学習の対象は拍節、調、音の長さなどへと発展し、時間形成のための拍節・拍子・リズムや、空間形成のための音高・音程、そして和音の響きへと段階的に学習内容を拡大していく。

中級の学年の「形成論」では、伝統的な作曲法から導き出される音楽構成（形式）の基本的概念を伝達することが中心となる。さまざまな時代に発生した音楽の表現形態（反復や対照など）をとりわけ音楽聴取をとおして学習する。このような音楽構成（形式）の知識は、さまざまなジャンルの音楽をとり上げることによってさらに拡大される。また、音楽の文化的背景にも着目することが重要である。

上級の学年「音楽の理論」では、音楽美学的認識や音楽の分析活動が中心となる。とりわけ学問への入門教育としての目標を達成するために、音楽学などの文献を扱ったり、分析活動と音楽理論の省察を関連させることが行われる。

このように、分析活動は音楽理論の枠組みの中でも最終地点に位置づくものである。基礎的音楽論から形成論へ、そして音楽の理論へという方向性に関して、フェルテンは学年に関連した教育計画に従うのが望ましいことを述べているが、学校教育を包括的にとらえた場合には、2つの方向性があるように感じられる。すなわち、各発達段階あるいは各教育段階のまとまりといった小さなステップの中での方向性と、初等教育段階から後期中等教育段階にかけての学校教育の大きな一連の流れの中での方向性である。この2つの方向性が有機的に作用して初めて、音楽理論の学習は高等教育や一般教育、あるいは音楽生活において高度化された成果として結実し得る。

2. 分析を中心に据えた合唱の授業構成

生徒一人ひとりが分析を行い、それらをクラス全員にフィードバックすることによって、歌唱活動へのモチベーションを高め、質の高い合唱表現へつなげるための授業を構成し実践した。なお、本授業の一部は、2005年9月に広島大学附属福山中・高等学校教育研究会において公開された。以下、指導について、教材について、生徒について、授業の計画と内容、および評価規準を示す。

(1) 指導について

音楽の授業では「表現」や「鑑賞」などの音楽的活動が中心となるが、これらの活動の基盤となるものを「音楽について考える（熟考する）」ことととらえる。すなわち、よりよく音を鳴らしたり音を知覚したりするために、楽曲の背景や構成について調べ、考え、議論することが必要だと考える。

音楽的熟達者が演奏する際には、意識的、無意識的に関わらず、楽曲についての情報が収集・分析され、より良い演奏のための重要な要素となっている。ここには明らかに楽曲に対する能動的な態度がみてとれる。このような楽曲に対するアプローチを音楽の授業の中に意識的にとり入れることによって、生徒自身が自ら考え、自らの手で演奏の可能性を探りながら音楽を創り上げる楽しみを感じ取らせることが大きなねらいである。

(2) 教材について

本授業では教材として、混声三部合唱「名づけられた葉」（新川和江作詞／飯沼信義作曲）を用いる。合唱はクラス全員が参加し、生徒一人ひとりが共に作用し合いながら曲を創り上げる活動である。合唱活動の特徴として、①複数の演奏者によるアンサンブルであること、②パートによる役割分担があり、自らの責任を果たす必要があること、③練習時に個人内あるいは生徒間に心理的葛藤が生じること、などが挙げられる。したがって、パートに分けられた複雑な音楽や合唱曲特有のドラマ性などに基づいてさまざまな観点から音楽を深く掘り下げて考えることができる。また、合唱活動には演奏に関わる技能のみならず、生徒間の社会的学習を支援する場としての機能を有している。つまり、1つの楽曲をクラス全員で創り上げる中で、他者とのように関わったらよいかを学ぶのである。このような音楽の複雑性と他者との共同作業という枠組みの中では、生徒一人ひとりが音楽に向き合い、自分の音楽的欲求に気づき、それを他者に提示し、議論し、一定の方向へと導いていく一連のプロセスが必要である。このプロセスをとおして

「音楽に関する情報を収集し、分析する」ことも達成される。したがって、個人で思考したことをグループの中で議論し、まとめる活動を重視している。他者から理解を得る（納得してもらう）ために、理由や根拠をともなった理論的思考をすることも重要な点の1つである。これらの点から、中学生にとって比較的難易度の高い「名づけられた葉」を教材として選択した。

（3）生徒について

本授業を受講した生徒（3年B組 40名）は、音楽に対して高い興味・関心をもっている。中学3年生になり、男子の中には友達同士でバンドを結成し休憩中や放課後に自主的に練習をする姿もしばしば見られる。女子は音楽の授業以外に個人でピアノのレッスンを受けていたり、合唱、吹奏楽、弦楽合奏などのクラブ活動に積極的に参加している生徒が多い。音楽の理論的基礎についての知識はあまりもち合わせていないが、歌唱や器楽など音を出して表現する活動には極めて意欲的である。自分の歌声をよりよくするためにどうしたらよいか、などの質問も多く受ける。合唱クラブに所属する女子生徒を中核に、女子全体はまとまった歌声をもっている。また、男子が比較的しっかりと声を出すクラスであり、中学3年生ならではの迫力のある混声合唱を行うことができる。

（4）授業の計画と内容

第1次 曲全体の把握とパート練習（2時間）

第2次 グループ活動による分析と発表、およびパート練習（3時間）

第3次 曲の仕上げとまとめ（2時間）

第1次では、まず楽曲の模範演奏をCDで聴かせ、楽曲に対するイメージ（第一印象）やこれからどのように歌っていきたいかを問いかけた。その結果、「暗い曲」、「難しい曲」と否定的な印象を答える生徒が多かった。しかしその中でも、「世界の中のひとりの人間として強く生きていこうというメッセージ」を感じたり、「訴えかけるようなあつい曲」だと感じたり、「力強く歌いたい」、「表情豊かに歌いたい」、「歌詞に合った歌い方をしたい」などの積極的な意見もみられた。その後、各パートに分かれてパート練習を行った。

第2次では、グループ活動により楽曲に関する分析を行った。まず、KJ法を用いて分析するポイントを整理した。その流れは以下の通りである。①生徒一人ひとりに付箋紙を配布し、楽曲の構成要素、演奏に関すること、楽譜を見て気がついたこと、分析してみたらおもしろそうなことなどをできるだけたくさん書き出す。②グループごとに1枚の大きな紙に付箋紙をすべて貼りつけ、類似するものをカテゴライズする。③まとめた各カテゴリーに見出しをつける。④各グループからでた見出しをまとめ、クラス全体で分析するポイントを決定する。

以上の手順を経て、分析のポイントを次の7点に決定した。すなわち、①リズム・アクセント、②感想・疑問点、③速度、④曲の構成、⑤歌詞、⑥歌い方・注意点、⑦雰囲気・イメージ、である。これらを各グループに割り当て、分析を行い、その結果を相互に発表することによって、分析内容を生徒全員が共有し、演奏につなげる。

第3次では、分析内容を生かした合唱活動を行い、曲を仕上げた。

（5）評価規準

<音楽への関心・意欲・態度>

合唱に興味・関心をもち、楽曲に関する情報を主体的に収集・整理し、演奏に関わるさまざまな可能性を探りながら活動に取り組んでいる。

<音楽的な感受や表現の工夫>

楽曲の背景や構成を理解し、それらをもとに全体の響きを感じ取りながら表現を工夫している。

<表現の技能>

楽曲の背景や構成を意識しながら、声部の役割や全体の響きに気をつけて合唱表現する技能を身につけている。

3. 分析活動の詳細

本授業の一番の特色は、生徒一人ひとりによる分析活動を基礎として、クラス全体で個々の分析内容を共有することである。そのために、先述したようにKJ法を用いた。第1段階は、生徒個々が気になる点をできるだけ多く書き出し、それをグループでカテゴリー別にまとめ、見出しをつける作業である。図1に示すのは、あるグループでまとめた内容である。

<p>○難しいところ</p> <ul style="list-style-type: none">・「ルルル」のところは音が上下して難しいので、まわりの人の音もしっかり聴く・高音が長くて息が続かない（プレスがほしい）・リズムが難しいところが多い・音の高低がはげしく、メロディーをつかむのが難しい <p>○音</p> <ul style="list-style-type: none">・最後のハモリをきれいにしたい・それぞれのパートがはっきりしている・音の幅が広い（→うたいにくい）・曲の中でメロディーがそれぞれ違う（雰囲気の）ところがある・16分音符など速いところもあれば、全音符などもある <p>○歌詞について</p> <ul style="list-style-type: none">・歌詞がだんだん前向きになる・「名はみな同じ」のところはさびしげに歌う・最初の「ポプラ」の「ポ」の音ははっきりと歌う・詩のくり返しが好き・歌詞が長いので早口になる <p>○曲の雰囲気</p> <ul style="list-style-type: none">・転調すると感じがかなり変わる・盛り上がっていくところがいっぱいある・カッコイイ曲。でも少し暗い。 <p>○歌うときに気をつけること</p> <ul style="list-style-type: none">・最後はアクセントばかり・クレッシェンドとデクレッシェンドが多い・高音部を柔らかく歌う・一つひとつの音をきっちりとする・高い声を出すところもアルトや男声を聴きながら歌う <p>○その他</p> <ul style="list-style-type: none">・後半の伴奏が難しそう
--

図1 KJ法を用いたグループによる分析のまとめ（あるグループの一例）

このように各グループがまとめたものをすべてのグループが持ち寄り、見出しによって示された分析の観点を整理した。それらの観点を各グループに配分し、分析活動を開始した。以下のA～Fに示すものは、いくつかのグループによる分析をまとめた記述である。

A) 感想と疑問について分析したグループの記述

- ★感想 ・カッコイイ。でも少し暗い。 ・言葉に重みがある。 ・リズムが難しい
 ・呼吸が続かない。 ・音がとりにくい
 →暗い、言葉が重いなど、かたい感じがする。また、リズムや音が変わりやすいので難しい。
- ★疑問 ・なぜポプラなのか？
 ポプラとは… セイヨウハコヤナギ、ヤマナラシ属、やなぎ科、高さ 20~30m、太さ 80~100cm になる落葉樹。
 葉の長さは 4~12cm。雄株と雌株がある。世界各地で並木として植えられている。
 英語 poplar ←ラテン語の人民を意味する populus が語源
 →世界各地にあるので、ポプラの葉を世界の人たちにたとえている。それにより、作者はポプラの葉が一番みんなに「ポプラの葉=あなたたち一人ひとり」という意味で伝えることができる。

B) 曲の構成について分析したグループの記述

1. 後ろ向きな歌詞とメロディー
 第1連「ポプラの木には~みなみな同じ」
 1人の力の小ささ、自分の小ささを強調している。
 →「いっしんにひらひらさせても/ひとつひとつのてのひらに/載せられる名は みな同じ」
 希望というより絶望。
2. 少し改善
 第2連「わたしも~朝に夕に」
 ただの葉にすぎないけれど、私という存在は1つだけで、他のなにものにも代えられない私で、強く生きようとしている。
 →「わたしは呼ばれる/わたしだけの名で 朝に夕に」
3. 使命感に燃える歌詞と情熱的なメロディー
 第3連「だからわたし~風がつよくとも」
 だから私は私らしく強く生きて散っていかうとしている決意を表している。
 →「緑をせいっぱい輝かせて散る法を」
 3番は1・2番と違い、最も盛り上がる。フォルテがたくさんあり、メロディーも違うし、高い音がたくさんある。

C) 歌詞について分析したグループの記述

<p>詩め ↓ 悩み ↓ 決意</p>	<p>ポプラ ↓ わたし ↓ わたし</p>	<p>ポプラの木には ポプラの葉 /何千何万芽をふいて 緑の小さな手をひろげ /いっしんにひらひらさせても… ひとつひとつのてのひらに /載せられる名はみな同じ</p> <p>わたしも /いちまいの葉にすぎないけれど あつい血の樹液をもつ /にんげんの歴史の幹から分かれた小枝に 不安げにしがみついた /おさない葉っぱにすぎないけれど わたしは呼ばれる /わたしだけの名で 朝に夕に</p> <p>だからわたし 考えなければならない /誰のまねでもない 葉脈の走らせ方を 刻みのいれ方を / せいっぱい緑をかがやかせて うつくしく散る法を /<u>名づけられた葉なのだから</u> 考えなければならない どんなに風がつよくとも</p>	<p>対 比</p>
-------------------------------------	--	---	----------------

(下線部は2回くりかえし歌う)

[全体の歌詞の意味]

ポプラの木は、どんなに努力して葉をしげらせてもみんな同じものとして扱われる。私たちも大衆の中の1人にすぎないけれど、私たちにはひとりひとり名前がある。だから私たちは、誰の真似でもない個性をもって、どんなにつらいことがあっても違うと認められたからには、一生懸命生きなければならない。

D) 曲の構成（転調）について分析したグループの記述

①へ短調（第5～20小節）

なぜへ短調でなければならないのか？

〔歌詞の雰囲気〕

自分のよさを出そうと努力しても、周りと同じで個性がない状況に落ち込み、自分の存在自体を否定している。暗いイメージ。

〔歌いやすさ〕

もしへ短調だったら・・・音が高すぎて歌うのがつらい。



へ短調の方がイ短調よりも重たく、暗いイメージの歌詞にぴったり合う。また、歌いやすいということもあり、へ短調が適している。

②変イ長調（第24～50小節）

なぜ変イ長調でなければならないのか？

〔歌詞の雰囲気〕

自分だけの名で呼ばれたことによって生きる希望を見つけた。まだ不安は残るものの、少し自信がもってプラス志向になる。

〔歌いやすさ〕

もしハ長調だったら・・・途中から音が高くなり難しい。



もしハ長調だったら明るすぎて、まだ不安が残っている悩みが表現できない。また、歌いやすさも考慮した結果、変イ長調がピッタリだろう。

③へ短調（第51～58小節）

なぜへ短調に戻ったのか？

〔イメージ〕

まだ不安があり、迷っている。嬉しいが責任も感じている。



自分の名がある嬉しさと同時に責任感を覚え、迷っているのでへ短調が合う。

④イ長調（第59小節～）

なぜイ長調なのか？

〔歌詞の雰囲気〕

自分だけの名をもって生きることに関心をもちながら、希望をもって前向きに生きる決意を固める。



自分の名をもったことで個性を見つけ、希望と責任をもって自分らしく生きる決心をする。つらくとも前向きに進もうとする力強さ、成長していく喜びがうまく表現できるイ長調が最適だと思う。

E) 歌い方について分析したグループの記述

○第32～37小節

ここから曲のメロディーは高く音の大きさは大きくなるので、感情をこめて歌う。

○第42～48小節

「わたしは呼ばれる」と2回くり返して同じ歌詞であり、さらに強弱記号も強くなっているため (*mf*→*f*→*ff*)、転調するまでで一番強く歌う。

○第51～58小節

伴奏、メロディーともに「風のイメージ」があるので、流れるように歌う。でも、速くならないように。

○第59小節～

転調前の不安やさみしさを感じさせない、力強い意志や希望のイメージ
(へ短調からイ長調へ転調する)



3つのパート全ての響き、重なり方から枝分かれするように、盛り上がり広がるように歌う。

F) 雰囲気・イメージについて分析したグループの記述

この曲は途中で調が変わっている。

○前半——暗い。歌詞からそう感じることもあるが、調も関係しているように思う。前半はフラットがつき短音階で構成される「変イ短調」なので、それが関係している。

○後半——長調になる。長調になると、歌詞は同じでもメロディーが変わるため、曲のふくらみが増す。フォルテやアクセントなどにより、強く歌う箇所が増え、全体的に曲が盛り上がる。

歌詞から分析する

○前部——「～させても」という表現は後に暗いものが続く
「載せられる名はみな同じ」 → 悲観的

○中部——**けれど**、前部を否定
「わたしだけの名で」 → 明るい

○後部——**だから** 中部でできた明るい雰囲気をつなげていく
「誰のまねでもない」「名づけられた葉」 → より明るく

ポプラの木には ポプラの葉
何千何万芽をふいて
緑の小さな手をひろげ
いっしんにひらひらさせ**ても** … 「～しても…」 暗いもの
ひとつひとつのてのひらに
載せられる名はみな同じ ポプラの葉

わたしも
いちまいの葉にすぎない**けれど**
あつい血の樹液をもつ
にんげんの歴史の幹から分かれた小枝に
不安げにしがみついた
おさない葉っぱにすぎない**けれど**
わたしは呼ばれる
わたしだけの名で 朝に夕に

←<転調>

だからわたし 考えなければならない
誰のまねでもない
葉脈の走らせ方を 刻みのいれ方を
せいっぱい緑をかがやかせて
うつくしく散る法を
名づけられた葉なのだから 考えなければならない
どんなに風がつよくとも

対照的

暗

明

変化

変化

暗

否定

明

「感想と疑問」のグループの「なぜポプラなのか」という素朴な疑問とそれに対する答えが、この曲全体の大きなテーマに深く関わっていることに生徒は気づき、とりわけ歌詞に着目したグループに大きな影響を与えている。「曲の構成」、「歌詞」、「歌い方」、「雰囲気・イメージ」ともに、調の変化と歌詞の意味内容との関連性に着目し、曲の中の主人公である《わたし》の心理的变化を的確に読み取っていることがわかる。基本的には暗い、否定的な歌詞内容には短調が用いられ、少しずつ前向きに《わたし》の考えが変化すると同時に変イ長調が用いられている。そして、強い肯定的な決心にともなってイ長調へと劇的に転調を行っている。この曲想の変化を文学的な要素と音楽的な要素の関連の中でとらえることができたのは、グループによる話し合いによってさまざまなアイディアを出し合った結果といえる。その中で、「曲の構成（転調）」について分析したグループは、変イ長調からイ長調へと転調する間に、一度最初の主題と同じ短調による間奏が挿入され、「ルルル～」という歌詞が付されていることにも言及しており、

この部分にも「わたし」の気持ちの揺れが表現されていることを指摘していることは、生徒が高い分析のまなざしをもってしていることを示唆するものと思われる。これに呼応するように、「歌い方」について分析したグループは、該当箇所表現方法について「伴奏、メロディーともに『風のイメージ』があるので、流れるように歌う。でも、速くならないように」と、他の箇所とは異なった曲想を感じるとともに、その曲想に合った歌唱表現の工夫が必要であることを見出ししている。

このように、中学3年生の感受性と音楽性は、「名づけられた葉」という少し難易度の高い合唱曲を提示することによっていっそう高められると考えられる。また、音楽を表現するためには曲の構造や歌詞の意味内容の把握が不可欠であることを認識することができ、思考する音楽活動を形成することが可能であることが示唆された。

4. 学習自己評価の記述からみえる生徒の学び

グループ活動を主体とする本授業では、授業への参加の程度や各授業の目標の達成度を確認するために、生徒の自己評価を2度行った。1度目は第2次の授業終了後に、2度目は第3次の授業終了後に、各項目5段階尺度による評価と自由記述によって行った。その結果をそれぞれ表1と表2に示す。

表1 第2次の授業終了後の学習自己評価結果

項目	非常にできた	ややできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
①グループ活動に積極的に参加できた	11人 (28.2%)	15人 (38.5%)	11人 (28.2%)	1人 (2.6%)	1人 (2.6%)
②パート練習に積極的に参加できた	19人 (48.7%)	16人 (41.0%)	4人 (10.3%)	0人 (0%)	0人 (0%)
③他のグループの発表に対して自分の考えをもつことができた	8人 (20.5%)	15人 (38.5%)	13人 (33.3%)	3人 (7.8%)	0人 (0%)
④分析内容を生かして合唱活動に取り組むことができた	7人 (17.9%)	23人 (59.0%)	6人 (15.4%)	1人 (2.6%)	2人 (5.1%)
⑤他のパートの響きや曲の雰囲気を感じ取りながら合唱することができた	16人 (41.0%)	17人 (43.6%)	5人 (12.8%)	0人 (0%)	1人 (2.6%)

(N=39)

まず、第2次のグループによる分析活動と発表を終えた際の学習自己評価について、生徒の記述をもとに以下のことが明らかとなった。①グループ活動に積極的に参加できたかについて、「非常にできた」11人、「ややできた」15人であり、全体の約67%が積極的に参加することができた。②パート練習に積極的に参加できたかについて、「非常にできた」19人、「ややできた」16人であり、全体の約90%がパート練習において十分に活動することができた。③他のグループの発表に対して自分の考えをもつことができたかについて、「非常にできた」8人、「ややできた」15人であり、全体の約59%が自分の考えと他者の考えを総合したり、他者の考えに対してなんらかの意見をもつことができた。④分析内容を生かして合唱活動に取り組むことができたかについて、「非常にできた」7人、「ややできた」23人であり、全体の約77%が分析内容を表現に転換できた。このことをふまえて、⑤他のパートの響きや曲の雰囲気を感じ取りながら合唱することができたかについて、「非常にできた」16人、「ややできた」17人であり、全体の約85%が合唱の表現技能向上に何らかの手ごたえを感じており、自己評価において本授業の評価規準を高い割合でクリアしている。

グループによる分析の相互発表をとおして新たに気づいたことや考えたことについて、自由記述をさせたところ、次のような記述があった。「1つの曲から考えられることは多いと思った」、「この歌の伝えたいことが改めて分かった」、「歌のストーリーを頭に入れて歌うと感じがでる」、「歌詞に深い意味があることに気づいた」、「自分の班と他の班の考えが似ていても、やっぱり少し違うので、人それぞれで感じ方が違うものだと思った」、「(他の班の分析から)新しい考えを発見し、ほとんどに共感できた」、「注意点がよく分かり、よりよい合唱になると思った」、「「わたし」の暗い気持ちと明るい気持ちを、歌詞やメロディー、強弱記号で表現しているということに気づいた」。これらの記述から、分析活動をとおして音楽をより注意深く観察し、音楽の表現技法に気づき、曲そのものに接近しやすい状況を生み出していることが読み取

れる。その結果として、歌いやすかったり、表現の可能性を発見し表現方法に踏み込んで合唱を仕上げていくことが可能となった。

表2 第3次の授業終了後の学習自己評価結果

項目	非常にできた 非常にそう思う	ややできた ややそう思う	どちらでもない	あまりできなかった あまりそう思わない	できなかった そう思わない
①グループでの分析活動に積極的に参加できた	9人 (23.7%)	20人 (52.6%)	5人 (13.2%)	3人 (7.9%)	1人 (2.6%)
②他のグループの分析内容が理解できた	9人 (23.7%)	25人 (65.8%)	2人 (5.3%)	2人 (5.3%)	0人 (0%)
③分析内容を生かして合唱活動に取り組むことができた	13人 (34.2%)	15人 (39.5%)	9人 (23.7%)	0人 (0%)	1人 (2.6%)
④他のパートの響きや曲の雰囲気を感じ取りながら合唱することができた	13人 (34.2%)	23人 (60.5%)	2人 (5.3%)	0人 (0%)	0人 (0%)
⑤分析をする前と後では、曲のイメージが変わった	10人 (26.3%)	17人 (44.7%)	11人 (28.9%)	0人 (0%)	0人 (0%)
⑥他の曲を演奏するときでも分析はした方がよい	5人 (13.2%)	22人 (57.9%)	9人 (23.7%)	2人 (5.3%)	0人 (0%)

(N=38)

次に、第3次の合唱の仕上げとまとめを終えた際に行った学習自己評価の記述から、以下のことが明らかとなった。①グループでの分析活動に積極的に参加できたかについて、「非常にできた」9人、「ややできた」20人であり、全体の約76%が積極的に参加できたと評価している。②他のグループの発表を聞いて分析内容が理解できたかについて、「非常にできた」9人、「ややできた」25人であり、全体の約89%が肯定的評価をしている。③分析内容を生かして合唱活動に取り組むことができたかについて、「非常にできた」13人、「ややできた」15人であり、全体の約74%が分析活動とおした学びを演奏につなげよう意識している。④他のパートの響きや曲の雰囲気を感じ取りながら合唱することができたかについて、「非常にできた」13人、「ややできた」23人であり、全体の約95%が合唱の技能が向上したことを認識している。⑤分析をする前と後で曲のイメージが変わったかについて、「非常に変わった」10人、「やや変わった」17人であり、全体の約71%が分析によるイメージの変化を感じている。この点に関してどのようにイメージが変化したのか自由記述させたところ、「暗い歌で正直嫌いだったが、そうでもなくなった」、「それぞれのパートで感情移入しやすくなった」、「作曲者、作詞者は工夫して曲を作っていることが分かった」、「ただ歌う感じだったのが、分析後に曲のイメージを感じながら歌うことができた」、「歌に込められた思いが分かった」、など男女ともに曲に対する愛着が高まり、表現の大きな手助けとなっていることがうかがえる。最後に、⑥他の曲を演奏するときでも分析をした方がよいかについて、「非常にそう思う」5人、「ややそう思う」22人であり、全体の約71%が音楽表現における分析の重要性を認識しているといえる。その理由について自由記述させたところ、「分析した方が曲をとらえやすい」、「歌い方を工夫しやすい」、「楽譜を見たときに個人でいろいろな観点から分析すべき」、「独奏（唱）なら自分だけのイメージで歌ってもいいが、合奏（唱）なら他の人と自分のそれぞれのイメージを合わせることで一つになりやすい」、「感情の入れ方が分かる」、など分析の利点を把握していることがうかがえる。一方で、「どちらでもない」9人、「あまりそう思わない」2人であり、全体の約29%は分析の必要性を否定的にとらえている。その理由としては、「分析による曲本来のイメージだけでなく、自分のイメージも大切にしたい」、「分析してもイメージは変わらない」、「歌い込めば分析の必要はない」、「そんなに深く考えなくても一生懸命楽しく歌えればよい」、「分析すると気をつけることが増えて歌いにくくなる」、などが挙げられた。

5. 分析活動を中心に据えた本授業のまとめと今後の課題

生徒の学習自己評価の記述から得られた知見を基に若干の考察を加え、分析活動を中心に据えた本授業のまとめとしたい。

第2次および第3次の授業終了後に行った2度の生徒の学習自己評価において、(1)「分析内容を生かして合唱活動に取り組むことができた」、(2)「他のパートの響きや曲の雰囲気を感じ取りながら合唱する

ことができた」、の2項目について比較すると、(1)では約77%から約74%へと若干の減少はしたものの、概ね高い割合で分析結果を表現につなげることができたとふり返りをしている。(2)では約85%から約95%へと10ポイントほど高くなり、分析内容の理解が深まったことや合唱に慣れてきたことなどの要因から、よりよい合唱活動や合唱表現を行うことができたとふり返りをしている。

生徒の記述からは、分析を行うことは楽曲を仕上げる上で利点が多いと認識していることがうかがえる。一方で、少数であるが否定的な意見もみられ、大きく次の3点にまとめられる。第1に、自分の意見も大切にしたいということである。もちろん楽曲に接する生徒一人ひとりがそれぞれ独自のイメージをもつことははじめの段階として必要である。しかし、他の生徒が指摘するように、合唱という演奏形態では全員のまとまったイメージが必要である。個々がアイディアを出し合い、互いの意見を擦り合わせて1つのイメージを創り上げることによって、アンサンブルにおける表現がより容易になるのではないだろうか。第2に、歌い込めばよい、深く考えなくても一生懸命楽しく歌えればよいということである。確かに授業で扱う楽曲のすべてを深く分析する必要はない。むしろ、高度な仕上がりを要求されるような楽曲を扱う際や、演奏を発表する機会がある場合などに、楽曲に生徒を没頭させ集中して演奏や表現活動に取り組むために分析活動を取り入れることが望ましいであろう。第3に、分析をしたがゆえに気をつけることが増えてしまい、逆に歌いにくいということである。分析することによって今まで気づかなかった楽曲の要素、構造、表現可能性などがあらわとなり、楽曲の理解は深まる。しかし、それらを演奏につなげる際に、どのように分析内容を消化し、発展させるか、つまり、分析内容を演奏活動へ定着させる手法については課題である。

本授業の柱である分析活動は、KJ法を用いて、個人による楽曲の印象や特徴の抽出作業（個人レベル）をグループによる分析活動（小集団レベル）へつなげ、さらに分析内容をクラス全体で共有するための相互発表（大集団レベル）へと発展させるプロセスを重視している。したがって、生徒一人ひとりの多様な分析のまなざしが必ずクラス全体の楽曲の解釈に盛り込まれることとなり、途中で生徒が脱落することのない集中的な音楽の授業を形成できたことは評価される。

おわりに

本授業の取り組みは、分析活動をとおして音楽について熟考し、そのために必要な情報を収集してまとめ上げる作業を多く含んでいる。楽曲をそのときのフィーリングでとらえるのではなく客観的にとらえて演奏につなげていくという点で評価できよう。学校教育の中に限ることではないが、すべての音楽を分析する必要はない。むしろ生徒のその場の直感を大切にしたい場面も多々存在する。しかし、生徒が音楽に対して理論的に、学問的に取り組み、成果豊かな学びをとおして音楽学習の充実感を獲得することは、教科としての音楽には不可欠な要素ではないだろうか。

注および引用文献

- 1) 伊藤真『ドイツにおける音楽科教育の現状と課題－ハンブルク州の音楽科教育プランと音楽科教員養成を中心に－』広島大学大学院教育学研究科修士論文, 2004, など。
- 2) Velten, K.: Musiktheorie. In: Helms, S./ Schneider, R./ Weber, R. (Hrsg.): *Kompendium der Musikpädagogik*. Kassel: Bosse 1995. S.144.
- 3) Ebd. S.145-147.